

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02433

研究課題名（和文）明治の「文明開化新詩」と清末の「詩界革命」 近代日中漢詩交流における「逆輸入」

研究課題名（英文）New Poetry Civilization in the Meiji Era and Poetry Revolution in the Late Qing Dynasty - A Reverse-Import Phenomenon in the Modern History of Japan-Chinese Poetry Exchanges

研究代表者

蔡 毅 (CAI, Yi)

南山大学・外国語学部・研究員

研究者番号：50263504

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：日中文化交流史の「逆輸入」という現象に着目し、過去十数年間おこなってきた「中国における日本漢文学の受容」の成果を踏まえ、清代末期黄遵憲・梁啓超をはじめとする「詩界革命」という文学革新運動が明治期の「文明開化新詩」、「漢詩改革」という新しい文学潮流からいかに影響を受けたかを中心に、近代における日中漢詩交流の新しい紀元の全容を究明することを目指している。日本から中国への文化流伝という、いわゆるフィードバック現象の研究は、日中文化交流史における相互影響の歴史的事実への再認識につながるのみならず、東アジア漢字文化圏全体に対する視座を大きく変え得るものと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究によって、従来殆ど顧みることがなかった近代日中文化交流史の新しい一ページが開かれるに違わず、東アジア漢字文化圏全体に対する視座を大きく変えることもできるのではないかと考える。漢詩という純粹な中国文学のジャンルにさえ相互交流の事実があり、さらに中国文人が日本漢詩から影響を受けたことは、日本文化の世界に対する発信の歴史を新たな角度から照らし出すことにもなるのである。一方、安易に閉鎖的且つ自足的なものと考えられてきた中国文学も、開放性・包容性を孕むものとして捉え直され、さらに広い視野で再検討されることも考えられるのである。

研究成果の概要（英文）：In the history of Japan-Chinese cultural exchanges, there was a phenomenon of reverse-import, that is, Japan learned Chinese culture, localised it, and then made impact on Chinese culture. For more than 10 years, the author did research on how Japanese Han-literatures have influenced China. In particular, the research focused on how the Poetry Revolution in the late Qing Dynasty, as represented by Huang Zunxian and Liang Qichao, had been influenced by the the New Poetry Civilization and Han-Poetry Reform, a literature trend in the Meiji Era in Japan. Studying the cultural reverse-import phenomenon should be beneficial to the understanding of the mutual impact of Japan-Chinese cultural exchanges; furthermore, it may lead to a rethinking of and change of perspectives on the East Asia Han-literatures.

研究分野：日本漢文学

キーワード：日本漢詩 明治文明開化新詩 漢詩改革 詩界革命 黄遵憲 梁啓超 逆輸入 日本漢文学

1. 研究開始当初の背景

日中文化交流史の研究において、近年一つの新しい動向がみられる。日本文化の中国へのいわゆる「逆輸入」に対する関心である。明治維新まで2000年にもわたる日中間の文化交流では、中国が日本に多大なる影響を与えたことは周知の通りだが、逆にその間に日本文化がある程度中国に伝わったことも事実である。日中の学者が共同編纂し、両国で同時に出版された『日中文化交流史叢書』(大修館書店と浙江人民出版社、全10巻、1996年)は両国の長い文化交流を総体的に把握することに努めた大規模なシリーズであり、このテーマに関する研究はこの20年間着実に進んでいるのである。

しかし、こうした研究の中で、日本文化の重要な構成要素である日本漢文学の中国への流伝については、ほとんど取り扱われていない。筆者が上記の「叢書」第9巻『典籍』に執筆した「兪樾と日中漢籍の交流」は、中国人が編纂した最大規模の日本漢詩アンソロジー『東瀛詩選』についての最初の全面的な検討である。それをきっかけとして、筆者は「中国における日本漢詩の受容」というテーマに取り組み、その様相を究明する15篇の単著論文を完成し、江戸末期までの日本漢詩の中国への流布はある程度解明した。(このうちの一部は、「中国における日本漢詩の受容」、平成21~23年度科研費基盤研究(C) 課題番号21520214によるものである。)この成果を踏まえ、さらに日本漢文へ視野を広げ、日本人による漢文著書が中国に伝わった経緯を「中国における日本漢文の受容」(平成24~26年度科研費基盤研究(C) 課題番号24520243)において探究した。

しかし、上記の漢詩に関するテーマの最後の段階、すなわち日本の明治期と中国の清代末期の日中漢詩交流に関しては、残念ながらもう一つの大きな課題が未解決のまま残っている。それは明治の「文明開化新詩」および「漢詩改革」が清末の「詩界革命」に与えた影響である。「詩界革命」とは、西洋文明がもたらした新しい事相や言葉を伝統的な漢詩ジャンルに取り入れようとする清末の文学運動で、中国では画期的な文学革新であるため、重要な研究テーマとされてきた。ところが、その起源について、今までの研究はほとんど中国国内における西洋文明の影響のみに着目しており、中国より先に西洋文明の新しい機運を積極的に漢詩に取り入れた明治期の「文明開化新詩」および「漢詩改革」との関係についての展望は皆無と言える。筆者はかつて「黄遵憲と日本漢詩」という論文で、「詩界革命」の代表的作家である黄遵憲が1877年~1882年の日本滞在中に「文明開化新詩」から啓発を受けた事実を論証した。これは学界で初めての問題提起であった。ただし、当論文は黄遵憲に関する考察にとどまり、同じく日本滞在中「文明開化新詩」、特に「漢詩改革」から影響を受けた「詩界革命」の提唱者梁啓超には言及していない。その後も管見の限りではこの斬新な発想に関する研究はまったくなく、2000年にもわたる日中漢詩交流史の「終点」においてもっとも重要な「逆輸入」現象の全容解明には至っていないのが本研究開始当初の現状である。

2 . 研究の目的

清代末期の「詩界革命」が明治の「文明開化新詩」および「漢詩改革」からいかに影響を受けたかを中心に、近代における日中漢詩交流の新しい紀元の全容を究明することを目指している。明治の「文明開化新詩」および「漢詩改革」が清末の「詩界革命」に直接的または間接的に与えた影響に関しては、未だ多くの資料が埋もれており、それを用いて、さらに事実を解明し得る可能性を秘めているのみならず、明治期における日中文化交流の歴史を大いに書き直すことも見込まれる。また、明治期漢文学の研究視野は今まで日本国内に限られるが、その外延が彼方の中国まで伸びるという事実を確認することによって、明治期漢文学自身の再評価に繋がることも考えられる。日本から中国への文化流伝という、いわゆるフィードバック現象の研究は、日中文化交流史における相互影響の歴史的事実への再認識につながるのみならず、東アジア漢字文化圏全体に対する視座を大きく変え得るものと考えられる。

3 . 研究の方法

まずは網羅的に日中双方の関連資料を収集し、そこから歴史的背景と作品の構成、語義にいたるまで綿密な考証を加えた上で、日中文化交流史における当該文献の意味を深く検討し、論文にまとめて国内外の学会で発表する。そして研究関係者の意見を参考にしながら論文を修正し、学会誌に投稿するというのは当初の予定であった。2018年は天津師範大学、2019年は貴州師範大学それぞれの国際学会で関連テーマの論文を発表したが、2020年よりコロナ禍で国内外の出張はほとんどできず、資料調査も手遅れのため、研究期間は延長せざるをなかった。それでも当課題執行の間、念願の著書『清代における日本漢文学の受容』(汲古書院、2022)を上梓し、当課題の研究論文も公表した(次節参照)ので、基本的に目標は達成したと言えよう。

4 . 研究成果

本研究の主旨は、中国の日本漢文学に対する受容の状況を考察することである。

前述のように、これまでの日中漢文学交流の研究は、大部分が中国古典文学の日本漢文学に対する影響を重視しており、歴史上少量の日本漢文学作品が中国に伝わり、様々な反響を呼んだという史実については、問題にされることが殆ど無かった。文学交流は双方向に影響し合うという視点から出発し、この一種の「逆輸入」現象に検証を加えることは、中国古典文学研究と日本漢文学研究の中に含まれるべき課題だろう。唐代から清代中期までの時期については筆者が長年検討してきたが、若干の史実にまだ更なる検証を要することから、本研究は清代末期(明治期相当)に焦点を当て、日本漢詩の中国における流布の軌跡を尋ね、特に明治期の「文明開化新詩」および「漢詩改革」が清末の「詩界革命」に与えた影響を追究した。

「詩界革命」とは、西洋文明がもたらした新しい事相や言葉を伝統的な漢詩ジャンルに取り入れようとする清末の文学運動で、中国では画期的な文学革新であるため、重要な研究テーマとされてきた。ところが、その起源について、今までの研究はほとんど中国国内における西洋文明の影響のみに着目しており、中国より先に西洋文明の新しい機運を積極的に漢詩に取り入れた日本との関係についての展望は皆無と言える。

筆者はかつて清朝の初代駐日公使館参事官黄遵憲の日本漢詩の見聞歴を考察した。黄遵憲は中国の近代詩人のうち傑出した者として、『日本国志』や『日本雑事詩』の著作時に大量の日本漢詩を読んで参考とし、また森春涛、森槐南父子や宮島誠一郎等、明治期の漢詩人と頻りに交流しており、これらのことはいずれも、黄遵憲が明治時代に流行した「文明開化新詩」に相当の理解があったことを証明している。このため、黄遵憲が日本を離れイギリスで創作し広く好評を得た「今別離」等の「新派詩」は、明治時代の「文明開化新詩」の影響を受けている可能性が高く、これは日中漢詩交流史上、それまでになかった逆転現象であり、注目に値する。黄遵憲が日本に滞在中には何故これら流行の作風に手を染めなかったのかと言えば、中華伝統文化の守護者として、当時保守派から伝統に叛くものであると見なされていた新詩の創作活動に介入し難かったことによるであろう。こうした論旨は拙稿「黄遵憲と日本漢詩」(査読付き、『中國文学報』第71冊、京都大学、2006年4月、50-77頁)で述べている。

しかし、上述の論文で黄遵憲の「新派詩」が明治の「文明開化新詩」の影響を受けている可能性について論じたが、各種の漢詩創作の現象の羅列に止まり、表面をなぞったのみで、理論まで深く追及するに至らなかった。そこで、本研究は黄遵憲について多くの新しい材料を追加して検討し、さらに深掘りして「詩界革命」の理論的唱導者であった梁啟超を中心に、その発想の起源を究明した。

梁啟超は清末の「詩界革命」の提唱者であるが、この中国三千年の詩歌史の最後のひと調べとなった文学運動は、日本とどのような関係があったのだろうか。この問題について、未だ探求した者はいない。梁啟超は1898年戊戌変法に失敗して日本に亡命し、1899年12月に「詩界革命」の提議を行い、漢詩の中で西洋文明を吸収した新しい内容を表現し、「和製漢語」に現れる新しい語彙を用いることを主張した。実のところ彼が来日する以前、明治時代の漢詩壇においてはすでに「漢詩改革」、「漢詩改良」などに関する議論が多くあり、その独創的で型破りな主張は梁啟超のものと非常によく似ており、具体的な創作上の実践としては、同じく「詩界革命」の重要な参加者であった黄遵憲が見た明治期の「文明開化新詩」があった。このような背景のもと、梁啟超はこのような漢詩の新しい潮流の影響を受け、「詩界革命」の発想を生み出した可能性が高いと思われる。

しかし、はっきりしていることは、「詩界革命」がこのスローガンを打ち出したのは梁啟超の渡日の後であり、「詩界革命」の創作の代表者であった黄遵憲もまた、この以前に清朝の駐日公使館の参事官として日本に四年余り居留していたということである。この二人の主役の日本での滞在歴は、必ずや研究者の関心を引き、そこから進んで「詩界革命」の起源が日本にあるという假説を産んだはずであるが、今日に至るまで、実証を行った者は見当たらない。その原因は、学界が敏感に缺けていたというようなことではなく、恐らくは直接の証拠が無い

せいであろう。黄、梁兩名の言葉に、これについて言及したものは一つも無いのだ。彼らがどこから啓発を受けたのかを何故明言しなかったかと言えば、中国文人の自尊心に起因し、日本の漢詩に学んだと語るのを恥じたからであろう。梁啓超自身の言葉で言うならば、つまり「中国文学の名誉」を守る為である。

こうした論旨は拙稿「清末『詩界革命』起源の再検討 黄遵憲・梁啓超の明治漢詩との関わり」(査読付き、『中國文學報』第94冊、京都大学、2021年4月、31-54頁)にまとめられた。当論文をさらに『清代における日本漢文學の受容』という著書に収録し、勤務先の「南山大学学術叢書」の助成を受け、2022年3月汲古書院によって刊行された(398頁)。

なお、中国語の論文集、単著『東海浮槎録』は2022年11月河北人民出版社によって刊行された(248頁)。そのうち当課題に関連があるもの、「郷関何処 日僧月性『将東遊題壁』詩的『誤伝』」(郷関何れの処 日僧月性『将に東遊せんと壁に題す』詩の誤伝)、「日本漢詩在中国的流布軌跡」(日本漢詩の中国における流布の軌跡)、「『逆輸入』 江戸漢詩人的西伝努力」(「逆輸入」 江戸漢詩人の西伝への努力)、「『教学相長』 黄遵憲与明治『文明開化新詩』」(「教学相い長ず 黄遵憲と明治『文明開化新詩』」)などがある。

ほかに、本研究の延長線において、明治末期来日の田桐が著した『扶桑詩話』についても検討した。

詩話は古人が詩作を論じ、詩人の事跡を記録する基本的な様式であるが、多くは随筆や劄記の形をとり、体系的に整えられてはいない。宋代の欧陽修『六一詩話』に始まり、中国における歴代の詩話は夥しい数にのぼる。清末以降、日本漢詩に言及する詩話もまた陸続と出現した。しかし筆者の知る限り、中国の詩話で書名に「日本」或いは日本の別称を冠するもので、正式に出版されているものは僅かに二つしかない。一つは聶景孺の『桜花館日本詩話』、もう一つは田桐の『扶桑詩話』である。聶景孺の著作については、筆者は別稿にて考察する。田桐の著作については、日本には専門に論じたものは無い。中国大陸では陳春香の專著および宋紅玉の論文に章を設けて検討されており、また台湾の林香伶の論文にも言及されているが、これらの論述はこの書の内容に対する表層的な評論に留まっていたり、或いはこの書と清末の詩人達の結社との関連に偏っていたりして、その文献の由来について実証的に追究したものは無く、日本漢詩そのものに対する理解もかなり表面的である。こうした状況に鑑み、田桐『扶桑詩話』の編纂方法および構成の特色について詳細な検討を行い、その日中の漢詩交流史における独特の地位を垣間見ることとした。論文は「中国文人が見た日本漢詩 田桐『扶桑詩話』について」(査読付き、『東アジア比較文化研究』第22号、東アジア比較文化国際会議日本支部、45-59頁、校正済み、2023年6月刊行予定)である。

要するに、こうした「逆輸入」、すなわち東アジア漢字文化圏の中のフィードバック現象が、日中文化交流史について言えば本と末、強と弱の関係の中で起こる双方向の影響を体現し、中国人の日本認識について言えば、肯定的な認知価値を持ち、近代中国の文学革新について言えば、啓発と促進の積極的作用を引き起こしたと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 蔡 毅	4. 巻 94
2. 論文標題 清末「詩界革命」起源の再検討 黄遵憲・梁啓超の明治漢詩との関わり	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中國文學報（京都大学）	6. 最初と最後の頁 31-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蔡 毅	4. 巻 12
2. 論文標題 頼山陽『日本外史』の中国への流布	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『日本漢文学研究』（二松学舎大学）	6. 最初と最後の頁 27-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蔡 毅	4. 巻 22
2. 論文標題 中国人が見た日本漢詩 田桐『扶桑詩話』について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東アジア比較文化研究（東アジア比較文化国際会議日本支部）	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件/うち国際学会 8件）

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 明治「漢詩改革」と清末「詩界革命」
3. 学会等名 国際東方詩話学会第十二届学術大会（貴州師範大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 中日文化交流史上的「逆輸入」 以日本漢詩の在華流布為例
3. 学会等名 中国文化大学（台北）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 明治報刊所見「漢詩改革」与梁啓超の「詩界革命」
3. 学会等名 全球化時代の中国文学文献研究 第四届漢文写本研究學術論壇（天津師範大学）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 「詩界革命」再考 黄遵憲・梁啓超と明治漢詩の関わり
3. 学会等名 第32回中国文学会例会（京都大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 「詩界革命」新解 黄遵憲・梁啓超与日本「文明開化新詩」
3. 学会等名 清代文学第3回国際學術研討会（安徽大学）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 「詩界革命」新解 黄遵憲・梁啓超与日本「文明開化新詩」
3. 学会等名 概念史研究の亜洲転向国際学術研討会（南京大学）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 中日詞学交流佳話 清水茂先生与唐圭璋先生
3. 学会等名 紀念唐圭璋先生誕辰120周年及詞学国際学術研討会（南京師範大学、オンライン）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 略談日本漢詩的对華「逆輸入」
3. 学会等名 第三屆詩詞与詩礼文化研究国際論壇（上海大学、オンライン）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 日本劉禹錫研究概述
3. 学会等名 劉禹錫与中唐文学国際学術研討会（広州大学、オンライン）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 蔡 毅
2. 発表標題 日本人是怎样作漢詩的
3. 学会等名 中華詩詞創作國際研討會（南昌大学、オンライン）（國際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 蔡 毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院（東京）	5. 総ページ数 398
3. 書名 清代における日本漢文學の受容	

1. 著者名 廖肇亨、島尾新、衣若芬、蔡 毅ら14名	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央研究院中国文哲研究所（台北）	5. 総ページ数 668
3. 書名 共相與殊相 東亞文化意象的轉接與異變	

1. 著者名 蔡 毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 河北人民出版社（石家庄）	5. 総ページ数 248
3. 書名 東海浮槎録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------